

塵も積もれば山となる	〔大智度論〕	2
会うは別れの始め	〔白氏文集〕	5
春は花、夏ほととぎす、秋は月	〔傘松道詠〕	8
天上天下唯我独尊	〔長阿含経〕	11
これ人中の分陀利華なり	〔観無量寿経〕	14
天を仰いで唾する	〔四十二章経〕	17
人間到る処青山あり	〔清狂吟稿〕	20
山どりの ほろくとなく 声きけば	〔玉葉和歌集〕	23
仏法には明日というとはあるまじき	〔蓮如上人御一代記聞書〕	26
露の世は 露の世ながら せりながら	〔おらが春〕	29

挿絵／岡本 治

本書は、西本願寺「本願寺新報」に「仏教名言豆事典」と題して平成8年4月から11年3月まで毎月一回連載された36編から、本願寺出版社によって10編を選び、著者による脚注を新たに加えて編集したものです。
*本文中「註釈版聖典」の引用は「第二版」を用いています。

名言は短い語句の中に、さまざまな教えが凝縮されている。その言葉は幾星霜にわたってきらめいている珠玉のようだ。願わくばこの名言を、現在のあなたの暮らしの中で生かしてほしい。

辻本敬順

塵も積もれば山となる

いろはかるたに、「塵も積もれば山となる」という有名な諺ことわざがあります。わずかなものでも、積もり重なれば、高たか大なものになることのとえです。

この諺を聞くと、なぜか貯金箱を思い出します。

それは子どもの頃から、わずかなお金でも粗末にしないで、一生懸命貯めていけば大金持ちになれると、教えられていたからでしょうか。



しかし実際は、大金持ちになるまでに、封を切つてしまいい、塵はなかなか積もりませんでした。

『広辞苑』には、この諺は『大智度論』*だいちどろんに基づくとあります。

『大智度論』には「譬たとえば、微塵みじんを積みて山と成し、移動を得たべきことかたきごとし」とあり、これを出典としています。

仏典では、物質をもっとも微細びさいに分割し、これ以上分割できない最小の実体を「極微ごくみ」といいます。現代的には原子でしょうか。

その一極微を中心に、上下四方の六方に極微が集合した

*『大智度論』

全百卷。龍樹菩薩の著。『大品般若経』の註釈書であるが、広範な問題を論じ、一種の大乗仏教の百科全書のような書である。

一団を「微塵^{みじん}」といって、目に見える最小の物質です。

「粉微塵^{こな}」や「木っ端微塵^ぼ」の微塵^{みじん}です。

そのような小さなものでさえも、積もれば山となるというのです。

『仏教ことわざ辞典』（北辰堂発行）に、「塵は、ここでは僅^{きん}少なもののたとえであるが、仏教ではこの世の汚れのことで、煩惱^{ぼんのう}のことをもいう」とあり、「わずかな塵のような汚れが、大きな山となり、もはや動かすこともできないようなもの」と解説しています。

もしかしたら、それは、不良債権^{さいけん}のことですかね。

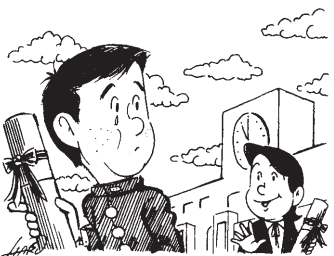
悪い塵はすぐ積もります。

会うは別れの始め

三月、四月は歓送迎会のシーズンです。卒業、入学、退社、入社、転勤、退任、就任など、年度がわりのための人の往来が多く、別れや出会いの季節ですね。

会うは別れの始め

この諺^{ことわざ}は中国の白居易^{はくきよい}の詩文集『白氏文集^{はくしもんじゅう}』にある「合者離之始^{みなもと}」を口語訳したのですが、その思想の源は仏教です。



*白居易 (772～846)

中国、唐代の詩人。字は樂天。その詩は流麗で平易、広く愛誦された。日本の平安時代の文学にも多大の影響を与えた。